戦後史探検 26
昭和二十年代を歩く

焼け跡の人情つないだ〝バラックの街〟 中

―七十七年の自治を展覧会で回顧―

ノンフィクション作家 三山 喬

昨年二月二十八日の午前中、数百戸もの住戸が消え去った跡地の野っ原に、ポツンと残っていた最後の一軒が重機で壊された。終戦の翌春から続いてきた仙台市・追廻（おいまわし）地区の歴史が幕を下ろした日。市の教育文化施設「せんだいメディアテーク」が十一～十二月に企画した回顧展『自治とバケツと、さいかちの実―エピソードで手繰る追廻住宅―』の会場では、その最も奥まった一角にこの家屋の廃材が展示されていた。

追廻の家への強い愛着

――解体当日は、どのような思いで作業を見ていたのですか。怒りや悔しさはありましたか。

「そういった感情はもうなかったです。（この古い家が）よくここまでもったな、という思いです。宮城県沖地震（一九七八年）も3・11（東日本大震災・二〇一一年）も乗り越えた家でしたから」

東京・新宿の喫茶店で落ち合ったこの〝最後の一軒〟の元あるじ・佐々木昇（六十五歳）は、故郷の消滅を見届けた感慨を、そのような言葉で説明した。

立ち退きの補償金を得て県南部の海沿いの町・亘理町に中古住宅を買い、現在はアニメ制作の仕事先がある東京と宮城とを行き来する生活を送っている。

「大学を出て東京で就職した私が、両親の死後、仙台に戻ったのは、何よりも追廻の家に強い愛着があったから。その家がなくなれば、仙台市に暮らす理由はとくにないんです。ただ追廻を出て約半年間、体調はずっと悪いままでした」

追廻住宅は、仙台空襲の被災者や外地からの引揚者の居住施設として、住宅営団が建設した応急簡易住宅だ。しかし佐々木の両親はそのような戦争の被害を受けたわけではない。建ち並ぶバラックは完成して二年後に入居者に払い下げられて、その後、たまたま空き家になった一軒を買い取ったのだった。

ふたりは宮城県中部の出身者。結婚後に仙台の街に出て、最初は広瀬川の対岸に家を買った。だがそこはすぐ、市民プールの建設用地になってしまい、それに代わる住居を追廻に求めたのだ。父親の職業は公務員。佐々木と六つ違いになる長女は川向こうの一軒目、第二子の佐々木は二軒目の追廻で生まれた。

「私が物心ついた一九六〇年代には、追廻にも電気やプロパンガス、水道はありました。住民が川で洗濯する風景は見なくなっていた。ただ道路が舗装されたのはだいぶあと。下水道は結局つくられず、トイレは最後まで汲み取り式でした。でもそんな環境が当時の私には普通だったから、住みにくいとか嫌だとか思ったことはありません」

購入時は「二軒長屋」のつくりだった住宅を、両親はやがて隣家と切り離した二階屋に建て直した。この家屋がやがて〝最後の追廻住宅〟となる。

私は前回の記事の中で、追廻での少女時代、家族同然の隣人たちに囲まれて〝面白くて仕方のない日々〟を送ったという元住民の回想を紹介した。佐々木も同様に「山もあり川もあり、遊び場には苦労しなかった」と、腕白少年には申し分のない街であったことを強調する。入り組んだ路地を日々駆け回り、缶蹴りをしたり、三角ベースを楽しんだり。夏祭りの時期になれば、神社境内での映画上映会を待ち焦がれた。

彼の口を突く記憶の断片には、地区内に班単位で設けられていた「子供会」の活動で、七夕祭りの笹飾りをつくったこと、あるいは「セツルメント」（英国発祥の地域慈善事業）の大学生たちが、しばしば遊び相手に来てくれた光景も含まれる。

子供会ということでは、野間宏・永丘智郎編『学生たちの記録』（一九五六年）という本に東北大生が組織したサークル「追廻住宅子供会」の活動記録が収められている。